

●診療所と障害福祉サービスとの連携の問題点

さいとうクリニック：横浜 齋藤庸男

齋藤 庸男（さいとう つねお）

【学 歴】 1982.3 月 宮崎医科大学卒業
【職 歴】 1982.6 月 横浜市大病院研修医
1984.6 月 財団法人復康会鷹岡病院勤務（富士市）
1986.12 月 横浜市大病院勤務
1990.6 月 さいとうクリニック開設
2002.10 月 医療法人社団自立会設立・理事長就任

【団体での活動】

2009.6 月 日本精神神経科診療所協会理事
2012.4 月 神奈川県精神神経科診療所協会会長

【賞罰】

2012.10 月 厚生労働大臣表彰

総合支援法の見直しにあたり、診療所と障害福祉サービスの連携が必ずしもうまく運ばぬ原因を述べる。

①福祉側からみて精神科診療所の敷居は高い。

これから連れて行っていいかと問い、すぐ連れといでと云ってくれるのは内科の先生。精神科はなんで連れてくるの、次回の診察日まで待てないの、あるいは電話口にさえ出してくれず受付職員に断られる。主治医が不在なので一回だけでも診て貰えないかとお願ひしても慇懃に断られる。食事は取れているか、睡眠はどうだ、排便はとは聞いてくれるが、患者が変りありません、順調ですと答えると帰ってしまう。こんなに目をギラギラさせ何日も眠れず具合が悪そうなのになんで分からないのかと職員が同行し受診すると、お前はなんだ、家族でもないのになんで附いて来たんだと怒鳴られる。気持を奮い立たせ、なんとか電話してもそれがどうしたと云われてしまう。いい先生もいる。電話を掛けてくれてありがとう、これからも見てやってくれといわれると涙が出るほど嬉しくなる。そのような精神科医は稀。受診同行はもちろん電話すら躊躇してしまう。ともかく精神科医は忙し過ぎる。

②精神科医は障害福祉サービスについて知らない。

通所施設である、地域活動支援センター、就労継続 A、就労継続 B、就労移行について、概ね違いの分かる精神科医はどれくらいいるだろうか。制度が変わる度になるだけついていかねばと思うが、覚える傍ら制度が呼び名がドンドン変わってしまい、理解すること自体を諦めてしまっている精神科医も多かろう。知的障害のグループホームと精神障害のグループホームの大変さの違いが分かる精神科医がどれくらいいるか。

③医療と福祉を繋ぐワーカーに見識のある信念の人が減った。

行政、医療機関及び福祉関係者を問わず、何か厄介な事を押し付けられるのではないか、あとで医師から嫌味を云われるのではないか、家族に言質を取られ上司から叱られないかなど、心ならずも患者の病状、家族の苦労を分かっているながら介入せず先送りしてしまう。結果として患者が入院し、目の前から消えてしまう。なんとかこの患者にお節介でも手助けしたいともがくワーカーが減った。事なかれ、確固たる信念に欠ける人が増えた。

以上、総合支援法の改正にあたり、連携に多する報酬が付く事を望む。